

千葉氏をめぐる人々

鶴岡さんの話から「千葉の姓」を考えてみた

<1> 鶴岡さんと千葉さんの話

9月に市内の公民館で歴史講座を受講した。テーマは「犢橋(こてはし)」の成立ちについて。

現在の千葉北インターチェンジの周辺に広がる犢橋町、つまりその昔の犢橋村の歴史を遡る話で、講師は地元に住む鶴岡義昭さん(90才)。

講師の鶴岡さんの家に残る文献や資料の中から、自らのルーツを調べ、村の変遷を調べた結果の話が断片的に語られるという内容だった。

先祖の系図を遡って行った結果、「鶴岡」という姓が使われた時期や経緯がわかったことについて触れていた。鎌倉時代に鶴ヶ岡八幡宮を建造するにあたり、各地から職人や労力が集められた。千葉常胤の求めに応じて鶴岡さんの先祖の方もその一員として地元の10名ほどの人とともに鎌倉に出向いた。

そして八幡宮が出来上がった時、その功に報いるとして、「鶴岡と名乗る」ことが許されたということだった。

近隣はもとより、房総半島に至るまで、千葉県には「鶴岡さん」が大変多いのは、このことと関係しているとのことだった。また、「鶴」の文字を含む地名や「鶴」の文字を含む姓の中にも、この関連が含まれる可能性があるようだとも言っていた。

千葉市花見川区犢橋町には、鶴岡姓が多く、以前から不思議に思っていた。血族が多いと思うが、血のつながりのない同姓も多いという。

インターネット上の「苗字由来 net」で調べて見たら、都道府県別に見ると鶴岡姓が一番多いのが千葉県(11,300人)で二位の東京都(3,700人)三位の神奈川県(2,000人)を大きく離している。また、千葉県の中でも市原市(2,300人)が一番多く、以下いすみ市・茂原市・木更津市・御宿町が上位を占めている。さらに人口の中に占める割合で見ると、御宿町・長柄町では人口の5%以上が鶴岡さんだという。

「苗字由来 net」を見ていて気になったので、ついでに「千葉姓」についても調べて見た。

千葉姓が多い都道府県は、宮城県(48,900人)・岩手県(31,000人)・東京都(19,400人)北海道(19,300人)で、千葉県には8,700人しかいない。

全国にくまなく広がっている「千葉」という苗字は、千葉氏が全国に影響力を及ぼした時代があったことにもよるのかもしれないが、肝心の千葉県ではさほど多くないというのは意外だった。全国に散らばった千葉さんの中で、千葉に生まれた千葉氏の流れを汲むものがどのくらいあるのかはわからない。

千葉市では、千葉氏が開府して900年になる2026年6月に「千葉開府の日」を定めて祝おうという動きがあるらしい。あらためて、千葉氏の盛衰の系譜を次項に整理してみることにした。

<2> 千葉氏の誕生

桓武天皇の曾孫である高望王は宇多天皇の勅命により889年(寛平元年)に平朝臣と名乗ることが許された。898年(昌泰元年)、平朝臣上総介高望として関東に下ってきた。後にその子である国香・良正・良兼・義持・良文などに関東の所領を継承させて、関東各地を押さえていた。

末子の平良文は相模国村岡(現在の藤沢あたり)を拠点としていたが、平将門の乱(939年)の前後に相馬を手中にして、このあたりで活躍するようになった。

平良文の孫である平忠常は、東庄の大友城を拠点として上総・下総一帯に影響力を持っていたが、官物の納入を巡る争いから1028年(長元元年)に安房の国司を焼き殺すという事件を起こした。

朝廷は忠常の追討を命じたが争いは長期化し、甲斐国国司である源頼信に追討を命じた。その結果平忠常は降伏し、京に連れて行かれる途中で死んでしまい、子孫達は処罰を免れた。

平忠常の子常将やその子常長は、荒廃した上総・下総を復興させて、房総全体に影響力を及ぼすようになった。平忠常の曾孫(つまり常長の子)常兼は、上総の大椎を拠点として大椎権介(おおじいごんのすけ)と名乗った。

常兼の子常重は1126年(大治元年)拠点を大椎から千葉に移して、千葉介常重と名乗り下総最大の荘園千葉荘を形作った。常重の所領は相馬・立花郷(のちの橘・香取・東庄)などで、さらに拡充に努めた。

1130年(大治5年)に相馬郡内の所領を伊勢神宮に寄進して、相馬御厨を成立させ、この地域の永代支配権を手に入れた。常重は、1135年(保延元年)に家督を嫡子常胤に譲って身を引いた。

1136年(保延2年)、下総国国司藤原親通は公田官物未進(税の滞納)の疑いで千葉常重を捕え、相馬御厨と立花郷の割譲を常胤に迫った。この事件を知った源義朝も相馬御厨の割譲を要求して来た。

常胤はやむなくこれに同意して、相馬御厨と立花郷を手放し、滞納していた官物を弁済して源の義朝の下に付くことにし、相馬御厨の永代支配権だけは取り戻した。

1160年(平治元年)の平治の乱により源義朝は平清盛に敗れ、所領は国に没収され、常胤は相馬御厨と立花郷(橘庄)を失うことになった。

1180年(治承4年)源義朝の子頼朝が伊豆で挙兵し、源平の戦いになる。結果として頼朝は平家に敗れて房総に逃れてくるが、ここで千葉常胤は頼朝の味方をして、鎌倉に拠点を構えることを進言し、鎌倉幕府設立に多大な貢献をした。その結果、一時失った所領はほぼ元通り手中にし、さらに東北・九州などにも所領を得て、鎌倉幕府屈指の御家人の座を確保した。

<3> 千葉介と千葉六党(ちばりくとう)

千葉常胤には7人の息子がいたが、天台宗の僧侶となった律静房日胤(にちいん)を除く6人に所領を分け与えた。6人の息子は、それぞれの所領の地名を姓として名乗り、長男の千葉介胤正を中心として強固な絆で結ばれ「千葉六党(ちばりくとう)」と言われた。

千葉氏としての名		所領	名乗っていた名前
長男	胤正	千葉・気仙・江刺・磐井・胆沢・栗原・登米・桃生・牡鹿	千葉介胤正
次男	師常	下総相馬・奥州相馬・行方	相馬次郎師常
三男	胤盛	武石・奥州宇多・奥州亘理・奥州伊具	武石三郎胤盛
四男	胤信	下総多部田・本郷・香取大須賀・奥州岩城・好島	大須賀四郎胤信
五男	胤通	下総国分・香取大戸荘	国分五郎胤通
六男	胤頼	下総東庄・三崎・郡上	東(とう)六郎胤頼

●千葉介胤正(千葉氏本流)

千葉氏は九州北部(現在の佐賀県あたり)にも所領を持っており、蒙古襲来の時には千葉介胤正の四代あとの頼胤は幕府の命を受けて長男宗胤とともにことにあたった。頼胤はこの戦で負った怪我が元で命を落とし、長男宗胤は長期にわたり九州の地に留まることになった。(九州千葉氏)

その結果千葉介頼胤の後継は次男の胤宗が継ぐことになった。

室町時代に入り、幕府の出先機関である鎌倉府の中で鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏との間で内紛が発生し、千葉氏・千葉六党の間にも亀裂が生じる。1455年(康正元年)公方側に付いた馬加康胤は、上杉派の千葉介胤直の居城である千葉城を攻撃。千葉城は落城し、千葉介胤直の一族は多古に逃れたが、康胤に襲われて全滅。

これにより千葉介本流は、馬加千葉氏が乗っ取った形になり、康胤一派は文明年間に入ると印旛郡大佐倉に築いた本佐倉城に拠点を移した。印旛沼・利根川などの水運を利用して古河公方などとの繋がりも確保した。

しかし、千葉氏本流滅亡の報を受けた足利義政は、馬加康胤追討の命を發し、岐阜郡上の東常縁(とうのつねより)を動かした。東常縁は反馬加勢力を結集して攻撃し(八幡合戦)、城を捨てた康胤は市原の八幡で自刃。遺体は八幡の地に葬られたが、のちに家臣らが墓から掘り出した康胤の首を幕張に持ち帰り堂ノ山に手厚く葬り、主君の霊を慰めたという言い伝えが残されている。(幕張首塚)

康胤の末裔である重胤一派は小田原北条氏に付き、1590年(天正18年)に豊臣秀吉が小田原城に攻撃を始めると小田原入りをしてこれに応戦。戦いの結果、北条氏側は100日の籠城の末降伏することになり、千葉重胤一派も所領を没収されて、滅亡することになった。

<4> 千葉六党を少し掘り下げると

長男の千葉胤正を頭とする本流(千葉介)の流れは概ね前述の様な足取りとわかったが、次男から六男までについてもそれぞれの流れを調べて見ることにした。

●相馬次郎師常は、

そもそも相馬氏は平将門の子小次郎将国が相馬を名乗ったことに始まるものらしい。940年(天慶3年)に平将門が討たれた時に家臣に我が子文国を託して常陸国信田郡に逃れさせた。文国はのちに信田小次郎を名乗ったが、その子孫である重国が千葉常兼に従って後三年の役(1083年~1087年)に参戦して功を上げ、相馬郡に住むことが許された。

この時期相馬郡は千葉常兼の子常晴が領しており、その子千葉胤国は相馬小次郎を名乗っており、胤国の子師国は下総藤原氏・千葉氏・上総氏・源氏の間での相馬郡を巡る争いの中で千葉家との交流を深めて、千葉常胤の次男次郎を養子に迎えて、師常と名乗らせ相馬氏の祖(相馬次郎師常)となった。

のちに師常は源頼朝の挙兵に参加。頼朝の弟範頼の軍勢に従って各地を転戦し、1189年(文治5年)には奥州合戦に参加しその功により頼朝から八幡大菩薩の旗を授けられた。

相馬次郎師常は1201年(建仁元年)、父千葉常胤逝去後に家督を嫡男義胤に譲り、出家し、1205年に鎌倉の屋敷で端座し念仏を唱えながら息絶えたと伝えられている。

●武石三郎胤盛は、

千葉常胤の三男胤盛は、1146年(久安2年)に誕生。短気で父親(常胤)との折り合いが悪く、しばらくは山ごもりしていたが、弟の胤信が不憫に思い自分の所領の千葉郡武石郷(現在の京葉道路武石 IC 周辺)を分けてやり武石に住ませた。

源頼朝が挙兵すると、父と共に頼朝に付き源義仲・伊勢平氏・奥州藤原氏などと戦った。奥州合戦の後、父常胤が恩賞として頼朝から受けた陸奥の所領の内、宇多郡(現在の相馬市新地あたり)・伊具郡・亘理郡を譲られた。

武石郷を領した子孫達はのちに千葉氏・里見氏に仕えたが、亘理郡を領した子孫はのちに拠点亘理に移して、亘理氏を名乗った。長野県上田市に武石と言う地名があり、胤盛にまつわる史跡が残っており、この地が武石三郎胤盛の所領だった証となっている。

●大須賀四郎胤信は、

先にも述べたように、1180年(治承4年)源頼朝は伊豆で挙兵するも石橋山の戦で平家に敗れて安房に逃げ延びた。頼朝は千葉常胤に助けを求め、常胤は鄭重に迎え入れて数々の支援をした。

千葉四郎胤信は、父常胤とともに千葉一族300騎を伴って下総国府に出向いて参戦した。

下総国香取郡の大須賀保(おおすかほ)は、下総平氏の平常継が領して、上総権介広常の配下で大須賀氏を名乗っていた。上総権介広常の謀反事件により所領は幕府に召上げられ、のちに千葉常胤に与えられた。

常胤は四男多部田四郎胤信に譲り、胤信が大須賀四郎胤信と名乗るようになった。

胤信は、1180年(治承4年)富士川の合戦・佐竹氏討伐などにおいて源氏軍の与力として力を発揮し、相馬御厨を千葉家に取り戻した。1184年(元暦4年)には源範頼軍に属して一ノ谷の戦に参加、豊後に出向いて軍功を上げ、上洛して洛中警護、奥州合戦などに参戦してさらなる功を上げて頼朝の厚い信頼を得た。

その結果、1200年(正治2年)頼朝から陸奥好島庄(いわき)を授かった。手に入れた所領は東西に二分割して嫡子通信と四男胤村に分け与えた。

1213年(建暦3年)、幕府内で和田義盛を首謀とする謀反が発生(和田合戦)したが、二代執権北条義時の命により胤信は三浦氏・足利氏とともに鎮圧し、その功により甲斐国井上庄(現在の御坂町井之上)を手に入れた。

●国分五郎胤通は、

下総葛飾国分郷(現在の市川市国分)を領して「国分」を名乗っていたが、後に香取矢作郷に拠点を移した。前述の様に、1180年に源頼朝が挙兵すると父や兄たちとともに頼朝に荷担し、三代將軍源実朝の代まで鎌倉幕府に仕えた。

国分胤通の嫡子常通は国分郷を継ぎ、弟の大戸四郎親胤・村田小五郎有通・矢作六郎常義はそれぞれ利根

川沿いに香取大戸郷・村田郷（現在の大栄町）・香取矢作を領した。

国分氏は、香取北部にいくつもの支流を産み出して、千葉介を支える有力な一族として君臨し、この地域に強い影響力を持ち続けた。中でも矢作六郎常義の系統が永く力を持ち続け、戦国時代末期までこの地域を押さえていた。

●東六郎胤頼は、

父千葉常胤に対して、源頼朝の旗揚げへの支援を進言し、自らも動き父の功にかなりの貢献をした。父から譲り受けた現在の香取郡東庄（とうのしょう）一帯を領して「東（とう）」の名を持つことになった。

胤頼と美濃の遠藤氏の娘との間に重胤が生まれた。遠藤氏は東家の実力者である家臣の一人だった。重胤もその子である胤行も上洛して主要なポジションを得ていた上に歌道にも明るく、高い評価を得ていた。

また胤行は、1221年（承久2年）後鳥羽上皇による鎌倉幕府への反乱（承久の乱）を鎮圧して功を上げ、美濃国郡上を与えられた。その結果、胤行の子の泰行は下総を所領とし、弟の行氏が郡上を受け継ぐことになった。郡上の東氏は、のちに足利義政の命により馬加康胤を滅ぼし、千葉一族の繁栄に終止符を打ったが、戦国時代末期に一門の遠藤六郎左衛門に城を追われて300年の歴史に終りを告げた。

<5> 千葉家から始まった名前の広がり

かくして千葉氏は現在の千葉県のほかに宮城県・岩手県などに広がり、それぞれの地に「千葉姓」を広めた。

それとともに、千葉氏に仕えた主力家臣たちも同様に、それぞれの地にその名を残した。

次男の相馬次郎は茨城県・福島県の相馬を中心に所領を持ち、それぞれの地に「相馬姓」や家臣の名前を広げることになった。

三男の武石三郎は下総の武石を拠点とし、さらに宮城県・福島県の県境一帯を押さえた。のちに亘理氏が活躍し、亘理という名前を中心に広がっていった。

四男の大須賀四郎は下総のほかに香取や福島県方面にも所領を持ち、大須賀と言う名を広めた。また大須賀一派の家臣達に、「須賀」や「須賀」という文字を含む姓を名乗らせたという事実もある。

五男の国分五郎は下総の国分（現在の市川市）あたりの他に香取の利根川沿い一帯を押さえており、所領とした地を押さえた家臣が、村田・大戸・矢作などを名乗り、それぞれの名前を広めることになった。

六男の東六郎は、下総の東庄一帯と岐阜県の郡上周辺を遠藤氏と繋がって押さえていた。東という名前は現代にまで脈々と繋がっており、その一部は天皇の系譜にも繋がっているらしい。

千葉氏と千葉六党の流れを辿ってみても、それぞれの人がそれぞれの地を所領とし、それぞれの地に仕えた家臣がいてその名が脈々と繋がり今日に至っている。

下総に広がった千葉一族の家臣の中でも領主クラスの地位を持っていた人の名前を羅列してみると、

白井の原氏、佐倉の原氏などの原氏系列、園城寺氏、粟飯原（あいはら）氏、大須賀氏（前述）、国分氏（前述）、東氏（前述）、海上氏（うなかみ）、相馬氏（前述）、高城氏、木内氏、白井氏、井田氏、押田氏などが上げられる。それぞれの人達が勢力を広げていくために縁を結んだり、配下の者の功に報い分配したりを続けながら、「姓」が生まれて広がって今日に至っている。

成田市や四街道市にある「中台」という地名は、遠い昔に中台氏が押さえていた土地らしい。中台氏は現在の稲毛付近の土地を手に入れた時に、この地を腹心の部下に分け与えた上で「小中台」という名を与えた。これが千葉市にある「小中台」という村名の由来と言われている。戦を重ねながらこのような事例も含めて、新しい「氏」が誕生してきたので、不思議な苗字や地名に出会ったら、その誕生の由来・経緯を調べて見ると面白いし、そこから歴史を学び直すこともできる。

以上

*補足情報 千葉氏の系図（収集した情報を元にして書いて見た）・・・次ページ参照

*参照情報・参考資料

千葉一族 <https://chibasi.net/ichizoku.htm>

千葉氏の歴史 <https://www.city.chiba.jp/chiba-shi/about/rekishih.html>

桓武天皇 | 葛原親王 | 高見王 | 高望王 (平高望) | 良文 | 忠頼 | 忠常 | 常将

常永 | 常兼 (大権権介) | 常重 (千葉介) | 常胤

胤正 (千葉介) | 成胤 | 胤綱 | 時胤 | 頼胤 | 宗胤 | 胤貞 (九州千葉氏)

胤宗 (千葉氏) | 胤胤

氏胤 | 満胤 | 兼胤 | 胤直

康胤 (馬加千葉氏) | 胤持 | 輔胤

孝胤 | 勝胤 | 昌胤 | 利胤 | 親胤 | 胤富 | 邦胤 | 重胤

胤富 | 親胤

胤繼

師常 (相馬次郎) | 義胤 | 胤綱 | 胤村 | 胤氏 | 師胤 | 重胤 | 親胤 | 胤頼

光胤

千葉六党

胤盛 (武石三郎) | 胤重 | 広胤 | 胤村

朝胤 | 長胤 (武石) | 憲胤 | 胤弘 | 重胤 | 高胤 | 盛胤

胤氏 | 宗胤 (亘理)

宗時

胤信 (大須賀四郎) | 通信 | 胤氏 | 朝氏 | 時朝 | 宗朝 | 宗信 | 憲宗

胤村 | 胤秀 (多部田) | 宗幸 | 朝信 | 直朝 | 朝胤 | 朝宗 | 胤朝

範胤 (成毛) | 宗正 | 憲康 | 常康 | 朝宗 | 常正 | 政常

時通

胤通 (国分五郎)

常通 (国分) | 常朝 | 重常 | 胤重 | 胤連

政朝 | 政氏

親胤 (大戸)

有通 (村田)

常義 (矢作)

胤頼 (東六郎) | 重胤 | 胤行 | 泰行 (下総) | 行長 | 行宗 | 胤頭 | 胤秀

日胤 (天台宗僧侶)

行氏 (郡上)